

# 南の風 432

南部地区ミニバスケットボール連盟

会 長 藤原 敬一

431号の続きです。

- ・「認知力」は、禁止事項があまりなく、自由で、たくさんの選択肢から選ぶ機会が多い環境で養える。
  - ・体格に劣る日本は、バスケットボールに限らず、コンタクトプレーのある球技、サッカーやラグビーで、脳内作業のスピードを上げることに力を注ごうとしている。
- (3) 活動の現場からみえること（サッカーにおける、スペインと日本との比較）
- ・日本では、勝つためにやらなければならないことが、大人から提示されることが多い。
  - ・スペインでは、「自分が思うようにやっごらん。これとこれだけ約束しよう」
  - ・スポーツ現場のパワハラについて、スペインでは法に守られているうえ、他者に対するリスペクトの概念が深いからか、小学生など育成年代の試合でもほとんど見かけない
  - ・日本の場合は、パワハラと認定されるブラックなものよりも、他大勢のグレーゾーンが多いようである。ベンチからプレーしている子どもを怒るコーチが珍しくない。そうやって萎縮させたら、子どもは自分で考えてプレー選択できない。脳の作業がしづらくなるから。
  - ・スペインではパワハラのようなことは起きないが、サッカーを語るときに選手ではなく自分（監督自身）を主語にしてしまう指導者が少なくない。彼らは、昔のやり方を引きするベテランコーチというわけではなく、年齢は関係ない。選手時代から得てきた学びと環境によるようである。20代のコーチもいる。生きてきた時代ではなく環境がものをいうことと、良きにつけ悪きにつけ文化は継承されてしまうことを思い知らされる。
  - ・ビジャレアルの3～5歳児のクラスは、保護者の子どもへの過度の期待を避ける → 「フットボール教室」という名称を付けない。わが子を何が何でもプロにしたいという過度の執着をもたれないようにする。保護者の熱を下げる工夫。中学生年代に上がったときに、その中から有望な子どもをスカウトしてチームをつくる。

続いて日本女子代表チームに就任した、恩塚 亨氏の会見から見えるものを紹介します。

## 1 目 的 ◎バスケットボール界に夢を残すこと

- ・私たち（恩塚氏やスタッフ、日本女子代表選手）の挑戦を見た方が、「私も頑張りたい」と夢を抱けるようになること。私たちは、そのためにバスケットボール界のロールモデルになりたい。
- ・この挑戦が、選手の本当の力、本当の強い力を引き出せると信じている。なぜなら、自分の頑張りが誰かの夢につながる、夢を残すことにつながる、と信じている人間の方が、自分の夢だけを追う人間より、私は強いと信じているから。